

◇ 5月の天文暦 ◇

日 時	記 事
5 19	立 夏 (太陽黄経 45°)
6 21	下 弦
11 20	金 星 最大光度
13 2	月 最近
13	朔
20 10	上 弦
21 8	小 満 (太陽黄経 60°)
25 24	月 最遠
27 9	金 星 留
28 13	望
31 17	土 星 合

言いたい放題・言いたい放題・言いたい放題

天文学会にお願いを一つ

私の「言いたい放題」は、唐人の寝言にもなりかねないので、はじめに締めくくりをする。「素人相手の天文解説書に、お灸をすえたり、ご褒美(の言葉)を出したりするのも、日本天文学会の1つの仕事と思って見たら…」

天文や、これに関連する科学の、所謂、解説書、啓蒙書、入門書といった本は大変に多くなった。○○新書、××選書、△△ブックスなどと銘打った1連の叢書の1冊として、次々に、続々と出版されている。お手軽な値段で、しっかりした内容らしいこれ等の本は、中学生、高校生には勿論、退職老書生にも関心の的になる。お安いとはいっても、300円にしろ、500円にしても、これらの人々には、お小遣をためたり、煙草錢を天引きしてのお金である。やっと手にした本は、財布の底をはたいて求め得たようなものである。処が一頁一頁と、頁をめくって行くと、どうも難解の箇所に次々と突きあたる。取り扱っている事柄が、むづかしいのだから、辛棒してもっとよく考えて読まないから、辻褄が合わないのだろうと自分に云い聞かせてみる。このまま途中で放り出しちゃ

てしまったのでは勿体ないと、大切な時間を結局は無駄にしてしまったことも度々である。「はじめから、終りまで読んで、よくわかりましたといえるような本などは無いのだよ」と教えられても、何だか、新聞・雑誌の広告や、批評で騙されたような、いやな感じが残ることがある。算数の参考書の類題をやってみて、答と合わないと、その問題か答かのどちらかが間違っているのだと、参考書不信になつては困ったことである。それかといって、難解の箇所にぶっかかる度に、自分の頭の悪さを痛感させられ、ガッカリしてしまう人もいるだろう。そんな本は悪書ともいいたい。「一般大衆向きの本を書く暇があるなら、もっと研究論文を書き給え」と忠告された大先生。「教科書1つ書けない者が、教科書検定の調査員になった処でなにが出来るだらう」と嘯いた畏友。「つまらぬ本を、つかまされたときには、けちな根性を捨ててそれをポイト屑籠に放り込むのですよ。ゴミが増えて困るということもないでしょう。あなたの狭い部屋が少しでも広く使えるようになって得策ですよ」と教えてくれた頭のよい学生。それでも私は標題のようなことを学会にお願いしたい。著者・翻訳者である先生方は、「読んでもらうのだ」という親切な気持で本を書いてもらいたいものだ。鉛と糊とで出来上った本でも、著者はその内容には精通し、その一貫した表現には十分な配慮がなされているものと読者は信じている。黒岩涙香の翻案「巖窟王」は、豊島与志雄の「モンテ・クリスト伯爵」より記憶に残っている。翻訳書については言いたいことが沢山あるが、最後にひと言だけ。原著者の名前にひかれて数年前買った翻訳本で、誠にいや思ないをしたことがある。所が最近の天文月報の広告欄に、その本の広告を見つけた。或はそれは改訂版の広告かも知れないが、青少年や老書生を、がっかりさせないように、学会は、ある意味での「お目つけ役」にもなつてほしいものです。「忙がしくて、そんなことにまで手は廻わせませんよ…」と言わないで。

(天文学科卒業生 中野三郎)

